

平成20年 7月31日
水産庁
独立行政法人 水産総合研究センター

平成20年度第1回太平洋イワシ・アジ・サバ等長期漁海況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
中央水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2008年8月～12月)のポイント

海況

潮岬以東の黒潮は、8～11月にかけて変動が大きく、B型とC型流路を繰り返すが、12月以降、B型流路となる。

沿岸水温は、潮岬以西が「平年並み」～「高め」、潮岬～伊豆諸島北部海域が「平年並み」～「低め」、伊豆諸島南部海域がB型時に「高め」、C型時に「低め」～「極めて低め」、房総沖がB型時に「低め」、C型時に「高め」、犬吠埼以北が概ね「平年並み」で推移する。

※ 平年並み=平年値±0.5℃程度、高め=平年値+1.5℃程度、
低め=平年値-1.5℃程度、極めて低め=平年値-2.5℃以下

漁況(来遊量予測)

マサバ・ゴマサバ太平洋系群

全体としては前年を下回る海域が多い。
1歳魚は前年を上回る。

マアジ太平洋系群

0歳魚は前年を上回り、1歳以上は下回る。

マイワシ太平洋系群

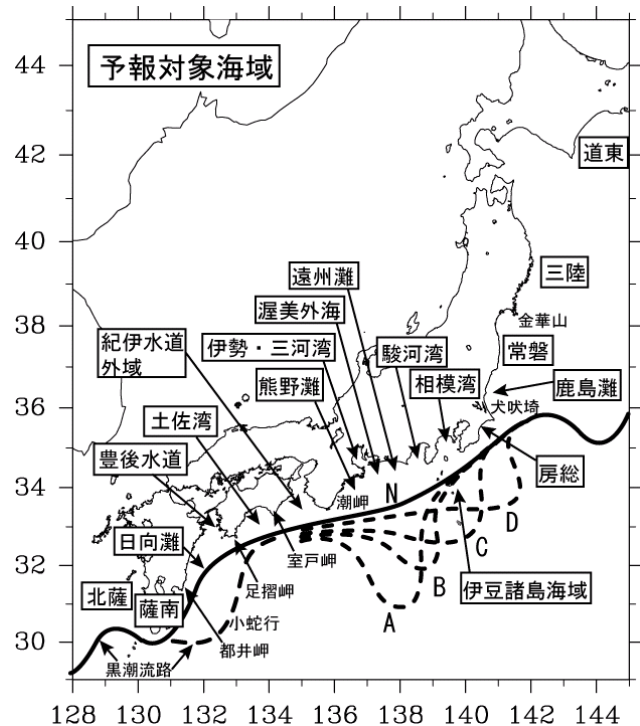
0歳魚主体に好漁となる海域もあるが、
全体として前年を下回る。

カタクチイワシ太平洋系群

0歳魚主体に好漁となる海域もあるが、
近年の中では来遊水準は総じて低い。

ウルメイワシ太平洋系群

前年並みか前年を下回る。



問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課 沿岸資源班

担当：大隈、和田、染川

電話：03-3502-8111(内線6800)、直通電話：03-6744-2377、ファックス：03-3592-0759

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/>

独立行政法人水産総合研究センター 中央水産研究所 業務推進部

電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://nrifs.fra.affrc.go.jp/>

参 画 機 関

北海道立釧路水産試験場	徳島県立農林水産総合技術支援センター 水産研究所
青森県水産総合研究センター	高知県水産試験場
岩手県水産技術センター	愛媛県農林水産研究所 水産研究センター
宮城県水産技術総合センター	大分県農林水産研究センター 水産試験場
福島県水産試験場	宮崎県水産試験場
茨城県水産試験場	鹿児島県水産技術開発センター
千葉県水産総合研究センター	大阪府環境農林水産総合研究所 水産研究部 水産技術センター
東京都島しょ農林水産総合センター	香川県水産試験場
東京都島しょ農林水産総合センター 大島事業所 八丈事業所	社団法人 漁業情報サービスセンター
神奈川県水産技術センター	気象庁 地球環境・海洋部 海洋気象情報室
神奈川県水産技術センター 相模湾試験場	海上保安庁 海洋情報部 環境調査課
静岡県水産技術研究所	水産庁 増殖推進部 漁場資源課 研究指導課
愛知県水産試験場 漁業生産研究所	独立行政法人 水産総合研究センター 東北区水産研究所 中央水産研究所
三重県水産研究所	
和歌山県農林水産総合技術センター 水産試験場	

中央ブロック海況予報

今後の見通し（2008年8月～12月）

(1) 黒潮（注：黒潮流型は図1を参照のこと。）

◎潮岬以西

- ・ 薩南海域の黒潮北縁は、屋久島南付近に位置し、11月に北上して接岸傾向となる。
- ・ 黒潮は、九州南東沖で離岸傾向で推移する。8～9月、四国沖では変動が大きく離接岸を繰り返すが、10～11月には潮岬以西全域で離岸傾向となる。

◎潮岬以東

- ・ 黒潮は、8～11月にかけて変動が大きく、B型とC型流路を繰り返すが、12月以降、B型流路となる。
- ・ 野島埼沖の黒潮は、離接岸を繰り返す。

(2) 薩南～房総沿岸域

- ・ 潮岬以西では、黒潮流軸の離接岸変動に伴って、一時的に暖水が波及することがある。
- ・ 潮岬以東では、熊野灘～伊豆諸島北部海域は概ね冷水域に入るが、熊野灘～遠州灘には一時的に暖水が波及することがある。伊豆諸島南部海域は蛇行北上部の変動に伴って昇温と降温を繰り返す。
- ・ 伊豆諸島南部海域は蛇行部の変動に伴って一時的に冷水域に入ることがある。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 房総沖の黒潮の離接岸および黒潮続流の南北変動に伴って、黒潮系暖水が沿岸域へ波及することがある。

(4) 沿岸水温

- ・ 潮岬以西は「**平年並み**」～「**高め**」で推移する。
- ・ 潮岬～伊豆諸島北部海域は「**平年並み**」～「**低め**」で、暖水波及時に「**高め**」で推移する。
- ・ 伊豆諸島南部海域はB型流路のとき「**高め**」、C型流路のとき「**低め**」～「**極めて低め**」で推移する。
- ・ 外房～銚子・九十九里はB型流路のとき「**低め**」、C型流路のとき「**高め**」で推移する。
- ・ 犬吠埼以北は概ね「**平年並み**」で、暖水波及時には「**高め**」で推移する。

※ 平年並み＝平年値±0.5℃程度、（やや高め、やや低め）＝平年値±1.0℃程度、

（高め、低め）＝平年値±1.5℃程度、（極めて高め、極めて低め）＝平年値±2.5℃以上

経過（2008年4月～7月） （注：経過は図2を参照のこと。）

(1) 黒潮

- ・4月中旬、N型流路からB型流路へと移行した。
- ・5月下旬、蛇行の東進に伴いC型流路へ移行した。
- ・7月下旬、D型流路へと移行した。

(2) 薩南～房総沿岸域

◎薩南海域

- ・4月、黒潮北縁は接岸傾向で推移した。
- ・5月、黒潮北縁は離岸傾向で推移した。
- ・6月以降、黒潮北縁は屋久島南付近の平均的な位置で推移した。

◎潮岬以西

- ・4月、九州南東沖で1月に形成された小蛇行が室戸岬沖～潮岬沖を東進した。
- ・4月中旬、九州南東沖で小蛇行の形成が始まり、都井岬沖で「やや離岸」となった。
- ・6月、九州南東沖の小蛇行が四国沖まで拡大し、都井岬沖～足摺岬沖で「著しい離岸」となった。
- ・7月上旬、小蛇行の一部が潮岬沖を通過し、四国沖の黒潮は「やや離岸」となった。

◎潮岬以東

- ・4月、房総沖で黒潮は大きく離岸した。
- ・4月中旬～5月中旬、黒潮内側反流が発達し、熊野灘～伊豆諸島北部海域で暖水の波及がみられた。
- ・5月以降、房総沖で黒潮は接岸傾向で推移した。
- ・5月下旬以降、伊豆諸島南部海域は冷水に覆われた。
- ・7月中旬以降、熊野灘～遠州灘へ暖水が波及した。
- ・7月下旬、伊豆諸島南部海域にあった冷水は東へ移動した。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・4月、常磐北部沿岸域から急激に親潮系冷水が差し込み、広く覆われた。
- ・5月、海域全体が広く親潮系冷水に覆われた。
- ・6月、黒潮が北上し、犬吠埼の沖合では低温傾向が解消した。
- ・7月上旬、親潮系冷水の波及が弱まり、常磐南部海域では低温傾向が解消した。鹿島灘では海面を除き、低温傾向で推移した。

現況 (2008年7月29日現在)

(1) 黒潮

- ・黒潮はD型からC型流路へ移行しつつある。

(2) 薩南～房総沿岸域

◎薩南海域

- ・黒潮北縁は屋久島北付近に位置し、接岸している。

◎潮岬以西

- ・黒潮は都井岬沖で「著しく離岸」、足摺岬沖～室戸岬沖で「やや離岸」している。

◎潮岬以東

- ・潮岬沖では「接岸」している。
- ・房総沖では接岸傾向である。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・黒潮統流の北縁は犬吠埼沖に位置し、東へ流去している。

※ 黒潮の離接岸に関する語句表記は、川合英夫(1972)：海洋物理Ⅱ、東海大学出版会に従った。

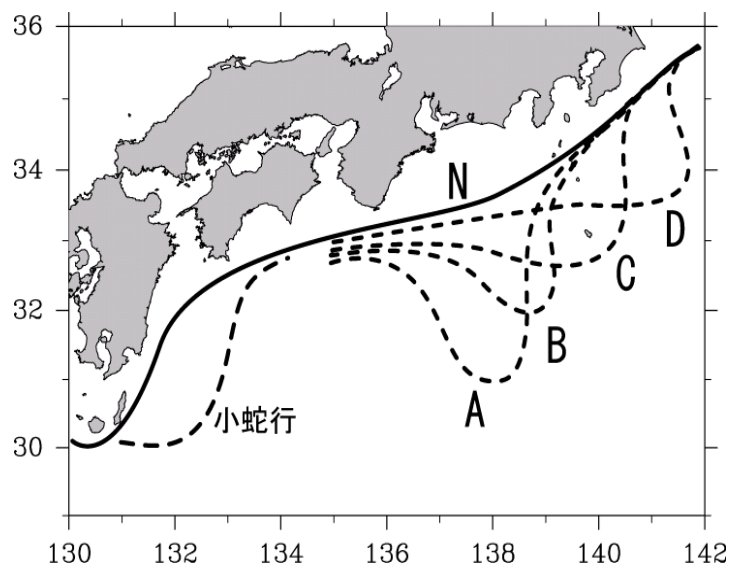


図1 黒潮流型の分類

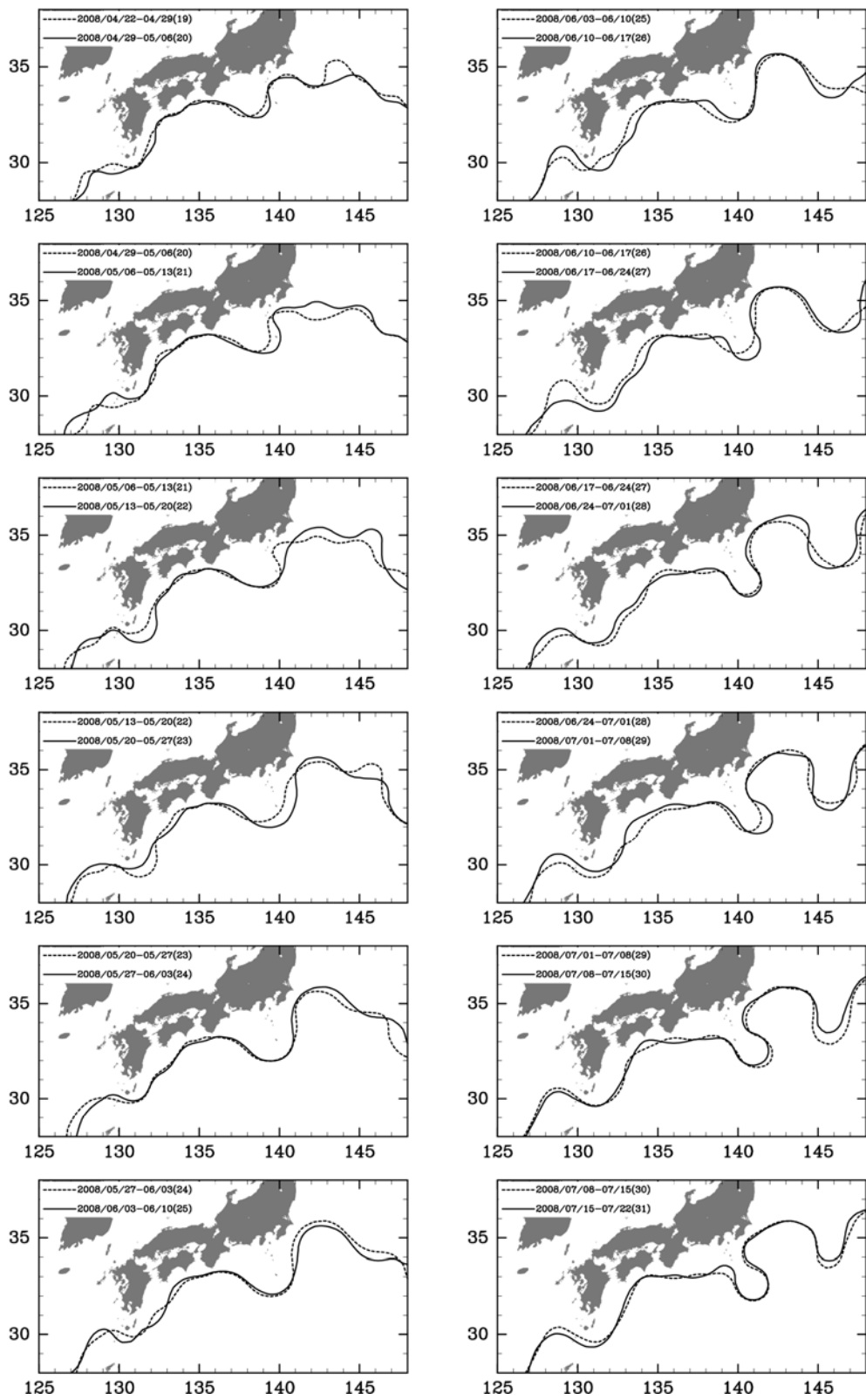


図2 黒潮流軸のパターン

(2008年4月～2008年7月, 海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

マサバおよびゴマサバ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し（2008（平成20）年8月～12月）

対象海域：薩南～豊後水道、紀伊水道外域、熊野灘、伊豆諸島周辺海域、犬吠～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、棒受網、たもすくい

対象魚群：0歳魚（2008（平成20）年級群）、1歳魚（2007（平成19）年級群）、2歳魚（2006（平成18）年級群）、3歳魚（2005（平成17）年級群）、4歳（2004（平成16）年級群）以上。魚体の大きさは尾叉長で表示。年初に加齢。

1. 薩南～豊後水道（まき網、定置網）

(1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバ0歳魚は前年並～上回る。1歳魚は、薩南では低水準であった前年並、日向灘～豊後水道では前年を上回る。2歳魚は前年を下回り低い水準、3歳魚は前年を下回り低い水準。4歳魚は前年を上回ることが多くない。サバ類全体としては、薩南～日向灘では前年、平年を下回り、豊後水道では低水準であった前年並～上回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：ゴマサバが主な漁獲対象となる。薩南海域では34 cm以下（0、1歳魚）。日向灘では30 cm前後以下（0、1歳魚）主体。豊後水道では主に27 cm前後（1歳魚）と25 cm以下（0歳魚）。

2. 紀伊水道外域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバ1歳魚は前年を上回る。2歳以上は前年を下回る。サバ類全体としては前年を下回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：ゴマサバが主な漁獲対象となり、30 cm前後（1歳魚）が主体。

3. 熊野灘（まき網、定置網）

(1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバ1歳魚は前年を上回る。0歳魚、2歳以上は前年を下回る。サバ類全体としては前年を下回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：マサバは混獲程度。ゴマサバが主な漁獲対象となり、25～33 cm（1歳魚）が主体で33 cm以上（3歳以上）も漁獲される。期後半から28 cm以下（0歳魚）も混じる。

4. 伊豆諸島周辺海域（棒受網、たもすくい）

(1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバ1歳魚は前年を上回る。2歳魚は前年を下回り低い水準。3歳魚は高水準の前年を下回る。ゴマサバとしては前年を上回る。サバ類全体としては前年を上回る。

(2) 漁期・漁場：ゴマサバは期を通じて三宅島および銭洲周辺海域で漁獲される。

(3) 魚体：ゴマサバが主な漁獲対象となり、27～30 cm（1歳魚）主体に30～36 cm（2、3歳魚）が混じる。25 cm以下（0歳魚）も漁獲される。

5. 犬吠～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：マサバ0歳魚は前年を下回る。1歳魚は前年を上回る。2歳魚は前年を下回る。3歳魚は前年を大きく下回る。4歳魚は前年を上回る。マサバとしては前年並。ゴマサバ0歳魚は前年を下回る。1歳魚は前年を上回る。2歳魚は前年並の低い水準。3歳魚は前年を下回る。4歳魚は前年を上回る。ゴマサバとしては前年を下回る。サバ類全体としては前年並～下回る。

(2) 漁期・漁場：定置網は期を通じて漁獲される。まき網は、マサバ主体で、8月は三陸北部～道東海域で漁場が形成される。9月は金華山周辺でも漁場が形成される。10月には三陸～常磐海域に漁場が広がる。11月は三陸～犬吠海域となるが、主漁場は常磐以南。12月には常磐～犬吠海域に漁場が形成され、犬吠海域が主漁場となる。また、期前半には常磐～犬吠埼沖でゴマサバ1、4歳魚を主体とした漁場も形成される。

(3) 魚体：マサバは25～28 cm（1歳魚）が主体となり、これに35 cm以上（4歳魚）が混じる。29～36 cm（2、3歳魚）も漁獲される。期後半に19～25 cm（0歳魚）が漁獲される。ゴマサバは30 cm前後（1歳魚）主体にマサバに混獲される。

漁況の経過（2008（平成20）年1月～7月）および今後の見通しについての説明

1. 資源状態

(1) マサバ

資源量は1990年以降依然として低い水準にあるが、加入量水準の高い2004年級群の発生により資源量が増加した。

2003年級群（5歳魚）以上の残存資源量は少ない。

2004年級群（4歳魚）は加入尾数（7月時点での推定値、以下同じ）37億尾と1992年級群を上回る高い水準であり、現在の残存資源尾数は63百万尾と評価され、4歳魚としては1990年以降で最高水準である。

2005年級群（3歳魚）は、加入尾数は5.4億尾程度と評価され、加入量水準の低い2003年級群並みの水準と判断される。現時点での残存資源尾数は53百万尾と評価される。

2006年級群（2歳魚）は、これまでの調査船調査および漁業における漁獲状況がいずれも悪い。本年評価では加入尾数1.7億尾と前年評価より上方修正されたものの過去最低の加入量水準と評価される。現時点での残存資源尾数は47百万尾と評価される。

2007年級群（1歳魚）は、いずれの調査船調査でも高い分布量が認められている。東北水研による2007年6～7月の中層トロールを使った西部北太平洋サンマ資源調査（サンマ漁期前調査）から推定された0歳魚現存量は299億尾と、2004年級群（64億尾）を上回った。釧路水試による2007年6～10月の流し網調査における0歳魚CPUEは31尾／網と、1996年以降で最高の値となった。各地漁業でも2007年12月より本格的に漁獲されており、2008年6月時点での累積漁獲尾数は4億尾と2004年級群の同時期の6割程度であった。茨城水試による未成魚越冬群指数は1,462で2004年級群の6割程度と算出されている。現時点での評価は加入後間もないため不確実性が高いが、加入尾数24億尾と近年では2004年級群に次ぐ高い水準と評価される。

2008年級群は、中央水研による5月の移行域幼稚魚調査の加入量指数が4.6と、2006年級群並の低い値であった。西部北太平洋サンマ資源調査0歳魚資源尾数は22億尾（暫定値）と2005年級群（11億尾）、2006年級群（0.25億尾）を上回ったものの、2002年級群の33億尾は下回った。マサバの産卵状況も60兆粒（6月時点の暫定値）と前年を大きく下回っていることから、2008年級群の加入量水準は低いと考えられる。しかし発生後間もない現時点での調査結果に基づく評価は極めて不確実である。

マサバの親魚量は2004年級群の高い加入により増加し、2007年産卵期の産卵量はマサバのみでも281兆粒と、1982年以来15年ぶりに200兆粒を超えた。しかし2005年級群、2006年級群の加入量水準は低く、2008年産卵期の親魚量は10万トン程度まで減少したと推定される。2007年級群は、現段階では不確実であるが、近年では2004年級群に次ぐ豊度の高い年級と評価される。2007年級群を保護することにより親魚量の減少を一時的なものにとどめ、更なる増加につなげることができると期待される。現在マサバ太平洋系群の親魚量の回復を目指した資源回復計画が実行されている。親魚量の増加傾向を維持しマサバ資源の回復を図るため、若齢魚の保護を継続する必要がある。

(2) ゴマサバ

資源量は1996、2004年級群の高い加入量水準によって増加し、2005年にピークに達した後、2005、2006年級群の加入量水準が低いために減少してきているが依然高い水準にある。

2004年級群（4歳魚）は、近年の卓越年級群である1996年級群（加入尾数14億尾）を上回る加入尾数30億尾の卓越年級群である。昨年まで各地漁業の漁獲主体となっていたが、1月以降も他の年級群とともに漁獲されている。残存資源量は多くないが4歳魚としては高い水準にあると推定される。

2005年級群（3歳魚）は、加入尾数が4億尾であり、これまでの漁況経過や調査船調査結果からも豊度

は低いと判断され、資源量は少ない。

2006年級群(2歳魚)は、加入尾数が2億尾であり、これまでの漁況経過や調査船調査結果からも豊度は過去最低水準であると判断され、資源量は少ない。

2007年級群(1歳魚)は、6月までの各地漁業の漁獲状況では、まき網、棒受網、たもすくいなどで2005、2006年級群の同期を上回って漁獲されており、熊野灘、伊豆諸島周辺、犬吠～常磐海域では漁獲物の主体となった。静岡県棒受網CPUEによる加入量指数(静岡水技研)は51.3であり、2006年級群(13.1)を上回るものの2004年級群(212.4)を大きく下回った。調査船調査では、稚幼魚期には北西太平洋において大量の分布が確認され、2004年以来となるヒゲクジラ類によるまとまった被食も認められたが(日鯨研調査資料)、夏季の索餌期以降は目立った量の分布はみられなかった。最近年のため推定値の不確実性が高いが、加入尾数は近年の平均的な水準である7億尾と推定された。

2008年級群(0歳魚)は、定置網などの各地漁業で漁獲され始めている。調査船調査では、移行域幼稚魚調査による加入量指数は5.6であり、過去同調査の2006年(4.9)を上回ったが、2005年(11.0)、2007年(14.0)を大きく下回った。西部北太平洋サンマ資源調査による親潮～移行域における推定現存量は22億尾(暫定値)であり、過去同調査の2005年(6億尾)、2006年(0.1億尾)を上回ったが、2007年(51億尾)を大きく下回った。これらの調査の資源量指標値から回帰式によって推定される加入尾数は3.1億尾であり、加入量水準は近年の平均を下回ると見込まれる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

1) マサバ

(1) 来遊量

資源状態に記したとおり、0歳魚(2008年級群)の加入量水準は、情報が限られており不確実ではあるが、高くはないと考えられる。1歳魚(2007年級群)の加入量は近年では2004年級に次ぐ水準と評価され、予測期間における来遊量は少なかった前年を大きく上回る。2歳魚(2006年級群)は加入量水準が低く、予測期間における来遊量は少なかった前年をさらに下回ると考えられる。3歳魚(2005年級群)の残存資源尾数は53百万尾と評価され、多かった前年を大きく下回る。4歳魚(2004年級群)の残存資源尾数は63百万尾と残り少ないものの4歳魚としては多く、前年を上回る。

以上のことから本予測期間は2007年級群(1歳魚)が主体となり、これに2004年級群(4歳魚)が混じる。2005年級群(3歳魚)、2006年級群(2歳魚)も漁獲されるが少ない。期後半には2008年級群(0歳魚)が漁獲されるがその量は多くはないと考えられる。しかし現時点での0歳魚の加入量の見積もりは非常に不確実である。マサバ全体としては前年並と考えられる。伊豆諸島以西の海域では、サバ類に占める近年のマサバの割合は低い。

(2) 漁期・漁場

常磐海域から犬吠周辺におけるまき網による2008年1～6月のサバ類水揚量は60,636トンと、操業自粛のあった前年同期(29,960トン)を上回った。千葉県以北沿岸の定置網による1～6月のマサバ水揚量は2,243トンと前年同期(2,839トン)並であった。伊豆諸島海域における、たもすくい・棒受網漁業(千葉県、神奈川県、静岡県船)の1～6月のマサバ水揚量は709.5トンと、前年同期(3,347トン)を大きく下回った。静岡県および三重県のまき網によるマサバ水揚量は前年並の低水準(1,750トン、前年同期1,833トン)、和歌山～宮崎県の1～6月のマサバ水揚量は1,733トンと前年同期(510トン)にくらべ好調に推移したものの、依然として低い水準であった。

今漁期は、常磐海域以北ではまき網・定置網での漁獲が中心となる。7月のまき網漁場は常磐海域にあり、三陸沿岸定置網への入網も増えていることから、特に北上の遅れはないと考えられる。8～9月は三陸北部海域を中心に道東海域でも漁場が形成され、その後の漁場の移動は前年と同様の経過をたどると考えられ

る。

伊豆諸島以西の海域では近年低調な漁況が続いており、本予測期間も漁場形成があっても不安定で低調に推移すると考えられる。

(3) 魚体

常磐から犬吠周辺では、1～6月にかけて18～28 cm（モード23～25 cm）の1歳魚が主体となり、これに加えて30～39 cmの大型魚（3、4歳魚）が1～3月と6月以降に漁獲された。産卵場である伊豆諸島海域では33～39 cm（モード35～37 cm）の3、4歳魚が主体となり、4～5月には25～27 cmの1歳魚が混じった。

2008年6月までの年齢査定結果や尾叉長組成の推移などから、関東以北における本予測期間の年齢別尾叉長は、1歳魚27～30 cm、2歳魚29～32 cm、3歳魚33～36 cm、4歳魚35 cm以上と考えられ、期後半に出現する0歳魚は例年の傾向から19～25 cmと予測される。年齢査定結果によると各年級群の尾叉長の範囲は広く重なり合っており、厳密な区分は困難である。なお、熊野灘以西の海域での成長はこれよりやや速いと考えられる。

2) ゴマサバ

(1) 来遊量

資源状態の項に前述の通り、0歳魚（2008年級群）はこれまで得られている情報から近年の平均を下回る加入量水準とみられ、来遊量は多くの海域で前年を下回る。1歳魚（2007年級群）は2005、2006年級群を上回り、近年の平均的な加入量水準と推定され、来遊量は低水準であった前年を上回る。2歳魚（2006年級群）および3歳魚（2005年級群）は、前期までの漁況でも漁獲は少なく、資源量水準は低いと推定される。来遊量は、2歳魚は前年同様に低い水準、3歳魚は加入豊度の高い前年の3歳魚（2004年級群）と比べることから前年を下回る。4歳魚（2004年級群）は、依然として各地漁業で漁獲されており、残存資源量は多くないが高齢魚としては高い水準にあると推定され、来遊量は前年を上回る。全体の来遊量は2004年級群主体で多かった前年を下回る。

(2) 漁期・漁場、魚体

1～6月のゴマサバ漁況は海域によって異なった。薩南海域では4歳魚、3歳魚を主体に前年、平年を下回り低調であった。日向灘では4歳魚に0歳魚混じりで前年を下回った。豊後水道は1歳魚と3歳以上主体に0歳魚混じりで平年を大きく下回る不漁であった。宿毛湾は前年、平年を下回った。紀伊水道は3歳以上主体に前年と平年を上回った。熊野灘は1、4歳魚が主体で高水準であった前年を下回ったが平年を上回る高い水準であった。伊豆諸島周辺海域では主に三宅島周辺海域が漁場で1歳魚主体に前年を上回った。犬吠～常磐海域のまき網では1歳魚主体でマサバに混獲され、漁獲量は前年を下回った。

1～6月の漁獲量は、薩南海域～紀伊水道外域は15.0千トン（前年同期実績23.2千トン）、熊野灘～伊豆諸島周辺海域は27.3千トン（同31.2千トン）、犬吠以北海域は3.5千トン（同3.7千トン）であった（漁獲量は各地主要港水揚げ資料および水揚げ物標本測定結果等からの推定値）。

各地の漁期・漁場と魚体は、薩南海域、日向灘～豊後水道では0、1歳魚が、紀伊水道～熊野灘では1歳魚がそれぞれ主体となって期を通じて漁場が形成される。伊豆諸島周辺海域では、近年の主漁場である三宅島および銭洲周辺海域を中心に1歳魚主体で期を通じて漁場が形成される。犬吠以北海域では1歳魚主体にマサバに混獲される。各地の漁獲物への4歳魚の混じりも多くみられる。

年齢別尾叉長は、これまでの体長組成の推移、年齢査定の結果から概ね次の通りである。0歳魚（2008年級群）：30 cm以下、1歳魚（2007年級群）：25～33 cm、2、3歳魚（2006、2005年級群）：29～36 cm、4歳魚（2004年級群）：35 cm前後以上。

マアジ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し(2008(平成20)年8月～12月)

対象海域:北薩～熊野灘、相模湾

対象漁業:まき網、定置網

対象魚群:0歳魚(2008(平成20)年級群)、1歳魚(2007(平成19)年級群)、2歳(2006(平成18)年級群)以上。年初に加齢。魚体は尾叉長。

1. 北薩～土佐湾(まき網、定置網)

(1) 来遊量:北薩～薩南海域の0歳魚は低水準の前年を上回り、1歳魚は低水準の前年並みで、全体として前年を上回る。日向灘では低水準の前年を上回る。豊後水道西部では低水準の前年並みか前年を上回り、東部では前年並み。土佐湾では前年を上回る。

(2) 魚体:19cm以下(0歳魚)が主体。20～24cm(1歳魚)も混じる。

2. 紀伊水道外域～熊野灘南部(まき網、定置網)

(1) 来遊量:紀伊水道外域では前年を下回る。熊野灘南部では0歳魚は前年を上回るが、1歳以上は前年を下回る。

(2) 魚体:紀伊水道外域西部では10～19cm(0歳魚)主体。紀伊水道外域東部では19cm以上(1歳以上)が主体。熊野灘南部では12～18cm(0歳魚)が主体で、11月以降は21cm以上(1歳以上)も混じる。

3. 熊野灘中北部(まき網、定置網)

(1) 来遊量:1歳魚は低水準、0歳魚は前年を上回る。全体として前年並みか前年を上回る。

(2) 魚体:14～18cm(0歳魚)主体。

4. 相模湾(定置網)

(1) 来遊量:前年を上回る。

(2) 魚体:10～19cm(0歳魚)主体で、8月は20～23cm(1歳魚)も混じる。

漁況の経過(2008(平成20)年1月～7月)および見通しについての説明

1. 資源状態:

資源量は1986(昭和61)年以降顕著に増大し、1990年代半ばは15万トンから16万トンと高位水準であったが1997(平成9)年からは減少に転じ、2001(平成13)年に増加したものの2005(平成17)年以降は減少が続いている。2007(平成19)年の資源量は約8万5千トンと中位水準であり、近年の資源動向は減少傾向である。

2006(平成18)年級群(2歳魚)は例年の経過から紀伊水道外域東部に来遊が予測さ

れる。この海域においては、今年1～6月の漁獲尾数は前年の同齡魚と同程度であったので、資源量は前年の同齡魚並みに少ないと考えられる。

2007(平成19)年級群(1歳魚)は、例年の経過から、今漁期を通して紀伊水道外域東部で漁獲の主体となり、他の海域にも来遊が見られると考えられる。今年1～6月の漁獲尾数は、北薩～紀伊水道外域では前年の同齡魚より少なく、熊野灘中北部では低水準であった。これらのことから、資源量は少ないと考えられる。

2008(平成20)年級群(0歳魚)は、例年の経過から、北薩～紀伊水道外域西部、熊野灘、相模湾では今漁期を通して漁獲の主体となると考えられる。九州南東沖における表層網による稚魚の採集数と日向灘南部の大型定置網への0歳魚の入網は低水準の2005(平成17)年～前年を上回った。

2. 来遊量、漁期・漁場：

(1)北薩～土佐湾 来遊の主体と考えられる0歳魚は、北薩～薩南海域では定置網やまき網への混獲が低水準であった前年及び過去5年平均を上回り、日向灘では7～12月のマアジ漁況と正の相関関係が見られる南部の定置網への入網が低水準の2005(平成17)年～前年を上回って2002(平成14)年、2003(平成15)年並み、豊後水道西部では標本定置網への入網が前年を上回り、豊後水道東部では前年並みの漁況で、土佐湾では春季から来遊が前年を上回った。一方、北薩～薩南海域の1歳魚は不漁の前年を上回り、過去5年平均並みであった。これらのことと資源状態から、来遊量は北薩～薩南海域では0歳魚は低水準の前年及び過去5年平均を上回り、1歳魚は低水準の前年並みで、全体として前年及び過去5年平均を上回ると考えられる。また、日向灘では低水準の前年を上回り、豊後水道西部では低水準の前年並みか前年を上回り、東部では前年並み、土佐湾では0歳魚、1歳魚ともに前年を上回ると考えられる。

(2)紀伊水道外域～熊野灘南部 紀伊水道外域西部では来遊の主体となる0歳魚の漁獲量が前年を下回ったので来遊量は前年を下回ると考えられる。紀伊水道外域東部では主体となる1歳以上が不漁であったので来遊量は前年を下回ると考えられる。熊野灘南部の0歳魚は、串本の棒受網と定置網の漁獲量が前年を上回ったので来遊量は前年を上回るが、1歳以上は前年を下回ると考えられる。

(3)熊野灘中北部 中型まき網の1歳魚が不漁で、1～6月の漁獲量と7～12月の漁獲量に正の相関がみられることから、1歳魚の来遊は低水準に推移すると考えられる。一方、定置網の0歳魚は5月から7月初旬まで好漁で、11～12月に中型まき網の漁獲対象として前年を上回る来遊が予測される。全体では前年並みか前年を上回ると考えられる。

(4)相模湾 7～12月のマアジの漁獲量に高い正の相関が認められる1～6月の0歳魚の漁獲量が前年同期を大きく上回ったので、主体となる0歳魚の来遊量は前年を上回ると考えられる。1歳魚は7月に入っても漁獲されたので8月も来遊すると考えられる。

マイワシ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し(2008(平成20)年8~12月)

対象海域:北薩~道東

対象漁業:まき網、定置網、船曳網

対象魚群:0歳魚(2008(平成20)年級群)、1歳魚(2007(平成19)年級群)、2歳魚(2006(平成18)年級群)、3歳魚(2005(平成17)年級群)。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 北薩~熊野灘(まき網、定置網)

(1) 来遊量:全体として0歳魚、1歳魚とも前年を下回る。

(2) 漁期・漁場:期を通じて。来遊量が少ない海域では9月まで。

(3) 魚体:12~18cmの0歳魚主体。熊野灘では18~19cmの1歳魚と13~16cmの0歳魚。

2. 伊勢・三河湾~相模湾(まき網、定置網、船曳網)

(1) 来遊量:0歳魚主体に前年を上回る。

(2) 漁期・漁場:期を通じて。遠州灘と駿河湾では散発的、伊勢・三河湾と相模湾では継続的に漁獲される。

(3) 魚体:13~18cmの0歳魚主体。

3. 房総~道東(まき網、定置網)

(1) 来遊量:漁獲の主体となる1歳魚は、前年を下回る。2歳魚は前年を下回る。3歳魚以上は少ない。全体として前年を下回る。12月以降漁獲対象となる0歳魚はカタクチイワシへの混獲程度。

(2) 漁期・漁場:8月は常磐北部~仙台湾、9~10月は仙台湾~三陸南部、11~12月は仙台湾~房総海域が漁場となる可能性があるが散発的。三陸北部以北~道東海域への来遊は依然として低水準。

(3) 魚体:8月は18cm前後、9~10月は19cm前後の1歳魚主体。8月は20cm前後、9~10月が21cm前後の2歳魚並びに22cm前後以上の3歳魚も混じるが少ない。12月以降漁獲対象となる0歳魚は12~13cm前後。

漁況の経過(2008(平成20)年4~6月)および見通し(2008(平成20)年8~12月)についての説明

1. 資源状態:

マイワシ太平洋系群の資源量は1994(平成6)年に100万トンを下回り、その後1999(平成11)年までは70万~90万トン台で推移したが、その後再び減少傾向となった。2003(平成15)年は12万トン台まで減少したが、その後微増傾向にあり、2008(平成20)年当初としては約15万トンと推定された。

2005(平成17)年級群は、1歳魚として2006(平成18)年6~8月、2歳魚として2007(平成19)年1~3月の房総~鹿島灘海域における活発な漁獲の主体となった。資源量水準としては、前後の年級群を上回ったが、2007(平成19)年夏季以降の漁況は低水準であり、今期(8~12月)の3歳魚としての資源量水準は低いと推定された。

2006(平成18)年級群は、1歳魚として、2007(平成19)年2月の越冬期浮魚類現存量推定調査(中央

水研)での分布密度は前年を下回った。その後6~7月の北西太平洋サンマ資源調査(東北水研)、9~10月の秋季北西太平洋浮魚資源調査(東北水研)並びに6~9月に実施された表層流網調査(釧路水試)でも、沖合域における分布密度は低かった。さらに、前期(4~6月)の漁況経過も低調であったことから、今期の2歳魚としての資源量水準は前年を下回ると推定された。

2007(平成19)年級群は、2007(平成19)年5月の移行域幼稚魚調査(中央水研)、6~7月の北西太平洋サンマ資源調査(東北水研)で、2005(平成17)年級群と同程度の分布量が認められた。0歳魚としては、北薩~土佐湾海域においては前年を上回る好漁を示した海域が多かった。一方、紀伊水道外域以東の海域では低水準であった。2008(平成20)年2月の越冬期浮魚類現存量推定調査(中央水研)では、CPUE(1時間曳網当り採集重量)が0.30(kg/網)で、前年の0.12kg/網を上回るものの、水準は高くなかった。房総~常磐海域の未成魚越冬群指数(千葉水総研)は、0.61で2006(平成18)年級群の0.59と同程度であったが、2008(平成20)年6~7月の漁獲状況は低調である。これらのことから、今期の1歳魚としての資源量水準は2006(平成18)年級群を下回ると推定された。

2008(平成20)年産卵期(前年10月~6月)の産卵量は約81兆粒と、前年同期の約150兆粒を下回っている。2008(平成20)年5月の移行域幼稚魚調査(中央水研)に基づく加入量指数は1.92で、前年の29.32を下回り、6~7月の北西太平洋サンマ資源調査(東北水研)でも、前年を下回る分布状況であったことから、現時点では、全体として加入量水準は低いと推定された。今後、0歳魚としての漁獲状況、秋季北西太平洋浮魚資源調査(今年度から中央水研)、未成魚越冬群指数(千葉水総研)並びに越冬期浮魚類現存量推定調査(中央水研)等の結果により年級豊度を判断していく。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体:

(1) 北薩~熊野灘

来遊量:前期において、薩南海域~豊後水道南部西側では0歳魚主体に低調で、1歳魚も少なかった。豊後水道南部東側~土佐湾は0~1歳魚主体で低調であった。紀伊水道外域西部では0歳魚主体に前年を上回った。紀伊水道外域東部~熊野灘では0歳魚、1歳魚とも低調であった。これらのことから、全体として今期の漁況は0歳魚、1歳魚とも前年を下回ると考えられる。

漁期・漁場:今期を通じて漁期となるが、来遊量が低水準であることから散発的であり、海域によっては9月までとなると考えられる。

魚体:前期の漁獲の主体は14cm未満の0歳魚主体であった。今期も引き続き0歳魚が主体となり、その体長は12~18cmと予測される。熊野灘の中型まき網では、前期は16~20cmの1歳魚主体であり、今期は18~19cmの1歳魚と13~16cmの0歳魚が主体になると予測される。

(2) 伊勢・三河湾~相模湾

来遊量:前期において、伊勢・三河湾、遠州灘~駿河湾、相模湾とも、マシラス漁況に回復傾向が見られた。引き続き0歳魚として漁獲され、その水準は前年を上回ると考えられる。

漁期・漁場:今期を通じて漁期となるが、0歳魚主体でまとまる程度により、遠州灘と駿河湾では散発的、

伊勢・三河湾と相模湾では継続的に漁獲されると考えられる。

魚体：前期のシラス並びに13cm未満の0歳魚が、引き続き体長13～18cmの0歳魚として漁獲の主体になると予測される。

(3) 房総～道東(まき網、定置網)

来遊量：前期において1歳魚の漁況は低調に推移し、7月に入っても漁獲量は伸びていない。まき網漁況はサバ類に対する活発な漁獲にも影響されるが、マイワシの分布密度自体も低いと考えられる。漁況の経過等から、1歳魚の来遊量水準は前年を下回ると考えられる。2歳魚は、近年5年では加入量水準の高かった前年の2歳魚を下回る。3歳魚以上は残存資源量が少ない。これらのことから、今期の来遊量は、全体として前年を下回ると考えられる。12月以降漁獲対象となる0歳魚は、現時点では加入量水準が低いと考えられることから、カタクチイワシへの混獲程度と予測される。

漁期・漁場：前期は犬吠埼周辺海域が漁場であったが、散発的であった。資源量水準が低いことから、今期も、三陸北部以北に及ぶ漁場形成は期待できず、期を通じて散発的になると考えられる。最近の傾向から、8月は常磐北部～仙台湾、9～10月は仙台湾～三陸南部、11～12月は仙台湾～房総海域が漁場になる可能性がある。三陸北部以北～道東海域への来遊は依然として低水準と考えられる。

魚体：前期は1歳魚主体に2歳魚が混じり、体長15～19cmであった。これに、体長20cm以上(3歳魚以上)が混じっていた。今期の1歳魚は、8月は18cm前後、9～10月は19cm前後になり、2歳魚は8月は20cm前後、9～10月が21cm前後になると予測される。22cm前後以上の3歳魚も混じるが、少ないと考えられる。12月以降漁獲対象となる0歳魚は、過去の傾向から12～13cm前後で出現すると考えられる。

カタクチイワシ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し（2008（平成20）年8月～12月）

対象海域：北薩～道東。

対象漁業：まき網、定置網、船曳網。

対象魚群：0歳魚（2008（平成20）年級群）、1歳魚（2007（平成19）年級群）、および2歳魚（2006（平成18）年級群）。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 西薩～鹿島灘のシラス（船曳網）

(1) 来遊量：西薩～日向灘では前年を下回る。伊勢湾～駿河湾では低水準で前年並み。相模湾～鹿島灘では前年並み。

(2) 漁期：全期間。

2. 北薩～紀伊水道外域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩・薩南では前年を上回る。日向灘～豊後水道では前年を下回る。土佐湾から紀伊水道外域ではまとまった漁獲がない。

(2) 漁期：全期間。

(3) 魚体：10～12cmの1歳魚および9cm以下の0歳魚。

3. 伊勢湾～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

(1) 来遊量：伊勢湾～渥美外海では好漁の前年並み。遠州灘～相模湾では前年を上回る。

(2) 漁期・漁場：全期間。

(3) 魚体：伊勢・三河湾、渥美外海は5～10cmの0歳魚主体に10～13cmの1歳魚が混じる。駿河湾～相模湾は5～10cmの0歳魚と10～13cmの1歳魚。予測期間後半では両海域とも5～10cmの0歳魚主体。

4. 房総～道東（まき網、定置網）

(1) 来遊量：低水準の前年並み。

(2) 漁期・漁場：1 そうまき漁場は12月以降に常磐～犬吠埼周辺に形成される。道東のまき網は9～10月。仙台湾～三陸の定置網は全期間。常磐の小あぐり・房総沿岸の2 そうまきは全期間。

(3) 魚体：常磐の小あぐり、房総の2 そうまきは6～10cm台の0歳魚主体。1 そうまきは12～13cm台の1歳魚主体。三陸の定置では13cm前後の1歳魚主体。道東のまき網では9～10cmの0歳魚主体。

漁況の経過（2008（平成20）年1月～7月）および見通しについての説明

1. 資源状態：

カタクチイワシ太平洋系群の資源量推定値は1998（平成10）年から2007（平成19）年まで80万～150万トンで推移している。水準は過去30年で高位、動向は5年間で減少傾向にある。本系群は漁場が形成される沿岸だけでなく黒潮親潮移行域まで広く分布している。

2006（平成18）年級群は、2007年6～7月の北西太平洋におけるトロール調査で10cm以上のカタクチイワシの分布量が2001年以降で最低であったこと、2007年秋季の道東まき網が不漁であったこと、2007年12月～2008年6月の常磐・房総海域において2歳魚としてほとんど漁獲されなかったこと等から、近年の中では低水準であると考えられる。

2007(平成19)年級群は、2007年6~7月の北西太平洋におけるトロール調査で10cm未満の未成魚の分布量が2001年以降で最高であったこと、道東で夏季に0歳魚としての来遊量が多かったことから、加入水準としては高いと考えられた。一方、9~10月の表中層トロール調査による0歳魚の採集状況、および0歳魚を主対象とする房総の2そうまきの漁況は、2005(平成17)年級群(中水準)が0歳魚であった2005年の状況と類似していた。2008年2月の房総~三陸沖の越冬期トロール調査(中央水研)における体長10cm以上の成魚の分布密度は、2002年以降で最低の水準であった。2008年1~6月における常磐・房総海域(千葉県~福島県合計)における漁獲量は7.3万トンであり、1999年以降(21.4万~7.8万トン)で最低水準の2000年並みであったが、漁獲物中には2歳魚(2006(平成18)年級群)がほとんど見られず1歳魚(2007(平成19)年級群)主体であった。以上のように、2007(平成19)年級群は0歳魚としては高水準であったものの各地の漁獲には繋がらず、沖合での分布量は2008年1~2月以降減少し、現況では近年の中で中水準であると考えられる。

2008(平成20)年級群に関しては、1~6月の本州太平洋岸における産卵量が3,032兆粒で、前年同期(5,974兆粒)および過去10年同期の平均(7,091兆粒)を下回り、1991~1997年(平均2,952兆粒)と同程度の水準であった。6月までのシラス漁況は、西日本で概ね低調、常磐海域で低調、東海地区(愛知~神奈川)で好調であった。2008年6~7月の北西太平洋におけるトロール調査における10cm未満の未成魚の推定分布量は前年を大きく下回り、2003年、2004年および2006年調査時と同程度であった。以上の状況から、2008(平成20)年級群は近年の中では低水準であると考えられる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体：

(1) 西薩~常磐南部のシラス(船曳網)

西薩では春漁(3~5月)が過去5年平均並みで前年を下回った。志布志湾では春漁(3~5月)が低調で来遊水準が低いと考えられる。日向灘では黒潮が接岸傾向であれば好漁となる可能性があるものの、豊漁の前年は下回ると予測される。豊後水道では来遊水準の予測が困難である。土佐湾では下半期のシラス漁が11~12月の漁で大きく左右されるため予測が困難である。伊勢湾及び渥美外海では同海域での卵の分布量が極めて少ない水準で推移しており、春季発生群はシラスとして豊漁であったものの、近年は春季発生群の年内における成熟度が低めとなる傾向があることから、過去10年平均を下回り前年並みと考えられる。遠州灘~駿河湾では暖水波及による海況の好転が予想されるものの、6月中旬以降のシラス漁況が低調であり、卵・仔魚の分布量も少ないため過去5年平均を下回り前年並みと考えられる。相模湾では卵の分布量から前年並みと推測される。鹿島灘では黒潮流路がC型・D型・N型の時に安定した漁となる傾向があり、今期は秋シラスの主漁期前半の8月にC型となることが見込まれることから漁獲量としては中水準で前年並みと予測される。

(2) 北薩~紀伊水道外域(まき網、定置網)

北薩・薩南海域では、北薩海域のまき網が好調であることから、来遊水準は高いと考えられる。日向灘では、夏季の漁獲の主体となる10~11cm台の魚体は春季の7~9cm台の魚体が成長したものと考えられ、5~6月の漁況は前年を下回る水準であったため、予測期間の来遊量も前年を下回ると考えられる。豊後水道

では、例年9月頃まで漁獲対象となる1歳魚(2007(平成19)年級群)がこれまで好調に漁獲されており前年を上回ると考えられるものの、期間を通して漁獲される0歳魚(2008(平成20)年級群)の発生量が前年に比べてかなり少ないため、来遊量は総じて前年を下回ると考えられる。土佐湾から紀伊水道外域では未成魚・成魚は主たる漁獲対象ではないため、まとまった漁獲は無い。

(3) 伊勢湾～相模湾(まき網、定置網、船曳網)

伊勢湾および渥美外海では春シラス漁が好調で、7月現在未成魚を中心に好調な漁獲が見られ、今後の漁獲の主体となる0歳魚(2008(平成20)年級群)の分布量が当該海域で高いと推測されることから、来遊量は高水準であった前年並みと考えられる。駿河湾～伊豆半島東岸ではシラス漁が好調であったことと、3月以降の伊豆東岸定置網および4月以降のまき網の漁況経過から、過去5年平均並みで前年を上回ると予測される。相模湾では上半期の漁況経過から低調であった前年を上回ると予測される。

(4) 房総～道東(まき網、定置網)

2008年1～6月における常磐・房総海域における漁況は低調であったものの、例年1～2月に漁獲の主体となる2歳魚(2006(平成18)年級群)がほとんど見られず、1歳魚(2007(平成19)年級群)主体であったことから、2007(平成19)年級群は近年の中では中水準にあると考えられる。ただし、2007(平成19)年級群は既に体長12～13cm台に達しており、1歳魚としては大型で、成長が速く夏季の産卵後に死亡すると考えられる。既にほとんど漁獲されていない2006(平成18)年級群は、今後も主たる漁獲対象とはならない。また、常磐・房総海域では12月以降の南下期から盛漁期となるが、近年は来遊が遅れる傾向にある。以上のような状況から、予測期間中の常磐・房総海域への来遊は低水準で前年並みと考えられる。0歳魚(2008(平成20)年級群)については予測が困難であるものの、鹿島灘における春シラスが低調であったことから低水準となる可能性がある。

常磐・房総海域における1そうまきの主漁場は、1～3月中旬は常磐南部から犬吠埼沖に、3月下旬以降は犬吠埼沖以南に形成された。近年の推移から、1そうまきの漁場は8月以降同海域では形成されず、南下期は12月以降に常磐から犬吠埼周辺に形成されると考えられる。1そうまきでは1歳魚(2007(平成19)年級群)が漁獲の主体となり、常磐の小あぐり、房総沿岸の2そうまきでは0歳魚(2008(平成20)年級群)が主体となる。

宮城県における4～6月までの漁獲量は、定置網を主体に2,453トンで前年同期の98%であった。体長組成のモードは5月で12～13cm、6月で13cmであった。

釧路水試により実施された道東～三陸沖太平洋における流し網調査(6月25日～7月3日、北辰丸)では、CPUEが6.1尾/回で、前年の1,668.7尾/回を大きく下回り、1994年以降で2番目に低かった。魚体は11.5～14.0cm台で13.0cm台が主体であった。秋季に漁獲の主体となる1歳魚(2007(平成19)年級群)の資源水準は中水準ではあるものの、沖合での分布が少ないことや夏季の産卵後に死亡すると考えられることから、夏季以降に道東へ来遊する資源水準としては、前年同様低水準になると考えられる。

ウルメイワシ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し(2008(平成20)年8月～12月)

対象海域:北薩～熊野灘

対象漁業:まき網、定置網、棒受網、多鈎釣

対象魚群:0歳魚(2007(平成19)年秋～2008(平成20)年生まれ)及び1歳魚(2007(平成19)年夏以前生まれ)。魚体は被鱗体長。

(1)来遊量:北薩～薩南海域では前年及び過去5年平均を下回る。日向灘～豊後水道では高水準の前年を下回る。ただし、日向灘では過去5年平均並みか上回り、豊後水道東部では過去20年平均並み。土佐湾では前年並みか前年を下回る。紀伊水道外域では前年を下回り、東部では過去10年平均も下回る。熊野灘では前年を下回る。

(2)漁期:土佐湾の多鈎釣は11月から。他は全期間。

(3)魚体:6～20cmの0歳魚が主体。8月までは20～23cmの1歳魚も来遊する。

漁況の経過(2008(平成20)年1月～7月)および見通しについての説明

1. 資源状態:

産卵量から判断して資源水準は高位、最近5年の推移から増加傾向にある。現在の漁獲は資源に大きな影響を与えていないと考えられる。なお、2007(平成19)年の産卵量は過去22年で最多を記録した前年の0.83倍で、4番目に多かった。

2. 来遊量、漁期・漁場:

北薩～薩南海域では昨年5～6月に見られた0歳魚の来遊が見られなかったことから来遊水準が低く、来遊量は前年及び過去5年平均を下回ると考えられる。日向灘では前年漁獲量との間に見られる正の相関から予測した今漁期の漁獲量が豊漁の一昨年及び前年並みとなったが、下半期の主漁期である7～10月のまき網漁獲量と正の相関がみられる1～6月の仔稚採集尾数が前年を下回り、1～5月のシラス漁が低調でウルメイワシの混獲率も低く、3～6月の南部の定置網における0歳魚の漁獲量も前年を下回っており、また近隣海域における0歳魚の漁況が低調に推移していることから、来遊量は過去5年平均並みかこれを上回るものの高水準の前年を下回ると考えられる。豊後水道ではウルメシラスの漁獲量、定置網への0歳魚の入網がいずれも前年より少なかったことから、高水準の前年を下回ると考えられる。土佐湾では定置網への0歳魚の入網が少なかったことから、前年並みか前年を下回ると考えられる。紀伊水道外域では4～6月の0歳魚漁が前年を下回ったことから前年を下回り、東部では過去10年平均も下回ったことからこれも下回ると考えられる。熊野灘では定置網への0歳魚の入網が前年を下回ったことと系群全体の2007(平成19)年の産卵量が前年を下回ったことから、前年を下回ると考えられる。